

哲学することを教えることはできるか

楨野 沙央理 (Saori Makino)

大正大学非常勤講師

哲学がある程度、テキストの読解を通じてなされるということから、哲学の「らしさ」は、テキストと読み手とのコミュニケーションによって形成される、と述べることができるだろう。つまり哲学の営みは、テキストが、読み手に対して何か技法とでも呼びたくなるようなことを教えている、ということ为前提として捉えられている。もしそうだとすれば、人が「哲学すること」をめぐる問いを発するとき、「哲学すること」をテキストが「何を」・「どう」教えることができるか、「テキストが哲学することを教える」ということで何が考えられるのかが問われることになるだろう。

本発表では、上述の問題意識のもと、哲学「らしさ」を自称する研究がどのような仕方ですそれを自称しているかについて、自己明晰化を図ってみたいと思う。

後期ウィットゲンシュタイン、それに加えて、J. L. オースティンや S. カヴェル、C. ダイヤモンドらの哲学から影響を受けた研究者によって、私たちが自明だとみなしがちな事柄——これを「日常性」と呼ぼう——を非・自明で鮮明なこととして捉え直す試みが行われてきた。具体的には、M. パーロフ(1994)、K. ドーバー&W. ジョスト(2003)、ジョスト(2004)、T. モイ(2017)らの仕事が挙げられる。彼女らの仕事は、哲学的な言説だとはあまりみなされていない。というのも、彼女自身らがもつばら、文学理論におけるウィットゲンシュタインのインパクトを問題にしてきたからである。実際、彼女らは、自身の試みを、「日常性の美学」(Perloff 1994: cf. Cavell 2004)、「日常言語批判」(Dauber & Jost 2003)、「修辭的探究」(Jost 2004) などと呼んでいる。それに加えて、文学作品を自在に用いて論を進める彼女らのスタイルが、一見すると、典型的な哲学の論文のようには見えない(この「見え」が偏見を前提としているにしても)、ということも考えられる。確かに、彼女らの仕事は、例えば「言語哲学」という呼称で典型的に呼び起こされるような哲学論文とはあまり似ていない(この「見え」が明示化を被るべきだとしても)と言えよう。

しかしながら、文学理論におけるウィットゲンシュタインのインパクトを問題にするというパーロフらの意志を尊重するとしても、(私を含む)哲学の研究者が、周縁化されたところに位置づけられた彼女らの仕事を、自分たちにとって極めて重要な意味を持つものとして発見することは可能であり、また、必要であると思われる。哲学研究らしくない見えを被っているパーロフらの仕事に着眼することは、哲学研究らしいと自称している仕事、どのような仕方ですそれを自称しているかの自己明晰化を促してくれる。

自己明晰化のために、モイが与えた対概念「精神 spirit」と「方法 method」(Moi 2017, p. 1)を利用したいと思う。モイによると、ウィットゲンシュタインが『哲学探究』の読

み手である私たちに残したものは、「精神」である。「精神」とは、「アプローチ」、「方法」、「理論」と対立する考えであるという。「精神」ということでモイは、「ある紛れもない口調、オーラ、ないし雰囲気のようなこと」を指している。(Cf. *ibid.*, pp. 1-2) モイの対概念が示唆することは、ウィトゲンシュタインのテキストに対して我々がとりうる二つの対比的な態度がある、ということだ。一方は、ウィトゲンシュタインのテキストから、誰にでも引き受けることが可能な哲学の方法を引き出す態度であり、もう一方は、テキストの文体そのものになすべきことが実行されていることを見てとる態度である。

どちらの態度を取るかによって、哲学することを「教える」ということで何を考えるかが異なってくる。モイの区分に倣って、ウィトゲンシュタインのテキストに「精神」を見出すなら、哲学することを「教える」とは、教える相手が気づくまで・気づくように、眼前で手本（いわば、哲学そのこと自体）を示して見せることであるだろう。手本を手本として見ることができるかどうかは、学ぶ側の自発的な気づきに依存する。他方、ウィトゲンシュタインのテキストに「方法」を見出すなら、哲学することを「教える」とは、誰が・どのように行うかに依存せず成立し達成できるようなシステムを形成してみせることであるだろう。

詳しい検討は発表内で行うこととするが、大まかな方向性として、私たち哲学研究者は、哲学を自称する際に、眼前において生じていることを無視し、その背後に何らかの形式（複数の事象を単純化するための道具）を透かし見ている、あるいは形成しているのではないかと考える。モイの区分を援用しながら述べるなら、我々は「精神」を無視し、「方法」を見出していると主張することになる。だが、こうした振る舞いをすぐに辞めるべきだとは主張せず、自分たちの傾向として引き受けることを提案する。最終的なゴールとして、哲学（少なくとも後期ウィトゲンシュタインを端緒とする「日常性の哲学」）は、眼前にあることの背後に形式を求める傾向に自覚的となり、いかに自分たちが眼前においてなされている事柄を見損ねているかを反省的に認識することであると論じたい。